

1998年度国際学会出張補助による研究発表要旨

Nanny's Daughters :

The Female Characters in the Works of Michelle Cliff and Paule Marshall

風 呂 本 惇 子

「ナニー」は18世紀前半、ジャマイカで逃亡奴隷集団マルーンを率いてイギリス軍に立ち向かった女戦士。西アフリカのアジャンティ出身で、魔術も使える小柄な老女だったと言われている。これまでは単に伝説上の人物として大して関心をもたれなかったようだが、1980年代から活発化したカリブの女性たちの文学活動のなかで、「ナニー」は急速に復活しつつある。グアドループ出身のマリーズ・コンデは『わたしはティチューバ、セイラムの黒人魔女』（1986）で主人公の後半生を、治療の術（魔術と見なされる）に秀で、奴隷の反乱を指揮するカリブ海の「フォーク・ヒーロー」のように描きたかったと述べ、「ナニー」を思い浮かべていたことを認めているし、ジャマイカ出身のミッシェル・クリフはこれまでに著した三つの長編、*Abeng*（1984）、*No Telephone to Heaven*（1987）、*Free Enterprise*（1993）で一貫して「ナニー」の精神的後裔を描きつけている。自分はニューヨーク生まれだが、両親がバルバドスからの移民であったポール・マーシャルは常にカリブ海を作品世界にもちこんできたが、最新作 *Daughters*（1991）では、明らかに「ナニー」を想定したと思える「コンゴ・ジェーン」が重要な役割を担っている。

Daughters はクリフの *No Telephone to Heaven* とさまざまな点で共通している。クリフの主人公クレアが父母の価値観の違いにとまどうように、マーシャルの主人公アーサもカリブ生まれの父とアメリカ生まれの母の姿勢の差に

気づいている。クレアの母は無口で、晩年の手紙でようやく「同胞を助ける人になってほしい」と言い残すが、アーサの母は彼女の幼少時から、奴隷反乱を指揮したというコンゴ・ジェーンの巨大な石像に触らせ、あからさまにジェーンへの敬意を育てる。クレアもアーサも島と英米を往復することによって島のネオ・コロニアルな状況を把握し、クレアは革命グループのゲリラ活動に身を投じ、アーサは、島民を搾取する開発計画を暴露して政治家である父をあえて失脚させる。マーシャルもクリフもナニーの生き方に学んだ母娘を描き、カリブの未来に必要な役割モデルとしている。

附記：上記は1998年度神戸女学院大学女性学インスティテュート国際学会出張補助により、第1回国際カリブ文学会議（1998年11月4日～6日、バハマ諸島ナッソー）にて行った研究発表の要旨である。